ＫＵ－ＵＡ　短期学生交流プログラム（京都）2013 終了報告

はじめに

本プログラムの概要は以下の通りである。「本プログラムは、京都大学農学研究科とカナダ国アルバータ大学農業・生命・環境学部（the Faculty of Agricultural, Life and Environmental Sciences, University of Alberta）との間で 2009 年に締結した部局間交流協定に基づいて 2010 年から開始した短期学生交流プログラムである。本プログラムの趣旨は、学部学生を相互に派遣して、両国学生に自国及び相手国の農業や自然環境をよりよく理解させ、将来の日本とカナダのリーダーとなるであろう学部学生の国際感覚を涵養することである。京都大学は、日本国の農業や環境をカナダの学生に紹介するため、フィールドトリップと講義を組み合わせた独自の研修プログラムを作成する。研修の実施においては、教員だけでなく京都大学農学部の学生も同行させ、両大学の学生の交流を図る。研修の終わりには、研修の成果を両大学の学部学生がグループごとに共同して取りまとめ、発表会を行う。研修は全て英語を使用言語として行う。」

本研修は、2013 年 4 月 30 日から 5 月 11 日までの約２週間にわたり実施された。アルバータ大学農業・生命・環境学部からは、１１名の学部学生と１名の教員（表１）が参加した。京都大学農学研究科からは、教員４名（今西純一、遠藤隆、吉田天士、渡邉哲弘）と学部学生（主に 2012 年度のアルバータ大学派遣学生と 2013 年度派遣予定学生）が研修の受入れ準備を行い、実際の研修に同行した（表２、表３）。日々の研修には少なくとも１名の教員と授業のない学生（２～１４名）が同行した。

日々の研修の概要を京都大学学生にまとめてもらったので、本報告書に掲載する。また、5 月 10 日には研修の報告会を４グループ（Agriculture in Japan, Forestry & Japanese Tradition, Food Industry in Japan, Environmental Conservation in Japan）ごとに行ったので、そのスライドを添付資料として掲載する。

本プログラムでは、土曜・日曜は自由行動として設定した。その日は農学部の学生が企画したプランで両大学の学生が行動したが、その概要の一端は本報告書に掲載されている「日々の研修の概要」と「添付資料のスライド」に紹介されている。

4 月 30 日と 5 月 10 日の夕方には歓迎と送別の会を、研修に参加した教員・学生そして研究科長及び副研究科長の出席を得て、旧演習林事務室で行った。特に送別の会では、両大学の学生の新密度が大いに高まっており、本研修の成果を実感することができた。

表１．アルバータ大学の参加者

Name	Program and Plan	Level	
Dunn,Scott Andrew	BSc in Enviro & Conserv Sc - Wildlife & Rangeland Resou-Maj	4th Year	Male
Fausak,Lewis Karl	BSc in Enviro & Conserv Sc - Land Reclamation-Maj	4th Year	Male
Hansen,Carly Ann	BSc in Agriculture - Animal Science-Maj/Range & Pasture Management-Maj	4th Year	Female
Haseltine,Christopher Daniel Dunn	BSc in Enviro & Conserv Sc - Conservation Biology-Maj	4th Year	Male
Kauffman,Anna Marie	BSc in Enviro & Conserv Sc - Environmntl Econ & Policy-Maj	3rd Year	Female
Laviolette Brown,Diana Rae	BSc in Agriculture - Crop Science-Maj	3rd Year	Female
Macmillan,Kira Ann	BSc in Animal Health - Cmpanion&PrformanceAnimals-Maj	3rd Year	Female
Mandrusiak,Daren Steven	BSc in Animal Health - Food Animals-Maj	3rd Year	Male
Predy,Leah Ashley	BSc in Agriculture - Sustainable Agric Systems-Maj	3rd Year	Female
Yang,Ya-chin	BSc in Nutrition and Food Sc - Nutrition and Food-Maj	3rd Year	Female
Zingel,Michelle Maria	BSc in Animal Health - Cmpanion&PrformanceAnimals-Maj	2nd Year	Female
大場　正人	アルバータ大学准教授		Male

表２．研修日程表　**KU-UA field-based training 2013**

April 29 (Monday)

Endo meets UA students at Kansai International Airport.

UA students check in Seihu-kaikan.

April 30　(Tuesday)

Morning: Guidance at a meeting room of Graduate School of Agriculture.

Afternoon: Campus tour of Yoshida campus of Kyoto University.

Evening: Welcome party (the students who participated UA-KU field-based training 2010 and 2012 will be invited).

May 1 (Wednesday)

Morning: Field trip to a lakeside district Harie Mizunosato in Takashima city.

Afternoon: Visit to the Center for Ecological Research of KU in Otsu city.

May 2 (Thursday)

Morning: Visit to Lake Biwa Museum

Afternoon: Visit to the Plant Breeding and Experimental Station of TAKII & Company, LTD., one of the leading seed companies in Japan.

May 3 (Friday)

Morning: Visit to Green Innovation Facility of Kyoto Prefectural University

Afternoon: Visit to Takayma Bamboo Park and rice-planting paddies in Ikoma city.

May 4 (Saturday), 5 ((Sunday)

All day: Free activity. KU students will accompany UA students.

May 6 (Monday)

Morning: Visit to a typical Japanese countryside with terrace rice fields and an indigo-staining workshop in Oohara.

Afternoon: Visit to a plant factory in Kameoka city.

Evening: Stay in Maizuru city.

Evening: Back to Seihu-Kaikan.

May 7 (Tuesday)

Morning: Visit to Maizuru Fisheries Research Station of KU and to Fisheries Technology Department of the Kyoto Prefectural Agriculture, Forestry and Fisheries Technology Center.
Afternoon: Visit to the KU Livestock Farm in Kameoka city.

May 8 (Wednesday)
Morning: Visit to a center for Japanese cedars Kyoto Kitayama Sugino Sato.
Afternoon: Visit to a bamboo thicket and a bamboo dealer Miki.

May 9 (Thursday)
Morning: Visit to a Instant noodle museum Instant Ramen Museum..
Afternoon: Visit to a beer brewery Suntory in Yamazaki.

May 10 (Friday)
Morning: Preparation for reports on the KU-UA field-based training.
Afternoon: Presentation of the reports.
Evening: Farewell party

May 11 (Saturday)
All day: Free activity. KU students will accompany UA students.

KU-UA 研修　日々の記録_2013 京都

4 月 30 日（火）

29 日の深夜に京都に到着したカナダ人学生と、約 8 か月ぶりの再会だった。午前中は農学部総合館の小会議室にて、カナダ人学生に向けた京都大学の紹介、今日の予定の説明などが行われた。ガイダンス後は 10 時半ごろに出発し、キャンパスツアーへ。農学部総合館内や京都農場、演習林、北部グラウンドなどを案内した。カナダ人学生の質問に答えられないことが多く、普段通っている学校内にも知らないことがたくさんあると痛感した。お昼は北部食堂でとった。英語で話すことが久しぶりということもあり、日本語のメニューを英語で説明するのに苦労した。何とか全員注文を終え、カツ丼やそばなど、日本食を喜んで食べてくれたときは嬉しかった。

昼食後はキャンパスツアーを再開し、本部構内を案内した。一通り案内を終えると歩いて銀閣寺へ向かった。銀閣寺では、それぞれのペースで見学した。日本に来て最初の観光地ということもあり、思ったよりも興味を示して楽しんでもらえたように思う。また、カナダ人学生はやはり植物への関心が強いと感じた。帰りは集合時間を決め、自由にお土産物屋さんを見て回った。早速ポストカードを買って家族へ送る学生もいれば、ソフトクリームを買って食べる学生もいたり、丸々 1 本キュウリの漬物の食べ歩きに驚いたりもしていた。銀閣寺からは歩いて宿舎の清風会館に戻り、長旅の疲れもあったので夜の歓迎会までは自由時間になった。

17 時からは旧演習林事務室にて交流会が行われた。お昼のキャンパスツアーには日本人学生は 3 人しか参加できなかったが、夜は前回参加者が多く集まった。さらに今年カナダに行く日本人学生も集まって、大変賑やかであった。先生の挨拶、自己紹介などをし、交流を楽しんだ。カナダ人学生だけでなく、今年は日本人学生もダンスが好きな人が多く、交流会後半はダンスで盛り上がった。前日の深夜に京都に着いたばかりにもかかわらず、カナダ人学生は本当にエネルギッシュだと感じた。

久しぶりにカナダ人学生と再会し英語に不安があったが、英語に慣れるまでの時間が短かったように思った。楽しく、有意義な時間になった。

（資源生物科学科 4 回生　田中友理）

5 月 1 日　(2 日目)

清風会館からバスに乗り、午前中は、滋賀県高島市新旭町にある針江地区を訪れた。小雨が頻繁にぱらつき、首をすくめるような寒さだった。針江は観光地化されておらず、そのままの生活空間をボランティアガイドとともに散策する。水田はちょうど代かきの時期であった。農業従事者の減少により目立つ休耕田を逆に利用し、ビオトープを設置したり魚道を整備したりと、かつての自然を取り戻す運動に力を入れている。

「水の郷」にふさわしく、針江の町は水路に沿うように形成されていた。深くは地下 20 メートルの深さに鉄や竹の管が打ちこまれ、比良山に降り注いでから長い年月をかけて濾過された雨水が「川端(カバタ)」に湧き出している。各地点に自噴する豊富な湧水は、飲料水を始め、生活用水のほとんどをまかなう水量を誇る。カバタから注いだ水路は代かき後のため泥がまざり、やや白っぽくかすんでいたが、溢れそうな水量を見るとすぐにでも澄んできそうに感じられた。水路の水がきれいであることは、針江の誇りだとガイドの男性は語っていた。放たれた鯉は高い水質を保つとともに、人々が水質に配慮するきっかけになっている。お土産の竹製コップで口にした湧水は、やわらかい味がした。
バスに乗って町の外れへ移動した先では、針江大川に面した古い船着き場が保存されていた。自然の生態系と人間の暮らしが両立する風景は水と共にあるのかもしれない。昼食は針江地区の郷土料理「しょいめし」であった。留学生たちも暗がりの中で箸を使って食べ、古き日本の食卓を疑似体験した気分になったのではないだろうか。

午後は琵琶湖沿いをバスで移動し、京大生態学研究センターを訪れた。短時間のレクチャーで主な研究紹介を聴講した後、近くに接している管理林へと歩いた。道すがら木々の紹介などの雑談を交えながら、日本の自然生態系を学んだ。カナダ人学生たちは、自国のそれとの植生の違いにとても興味を示していた。センター前で記念撮影を終え、清風会館への帰路に着いた。

(農学部資源生物科学科　4 回生　森奈保子)

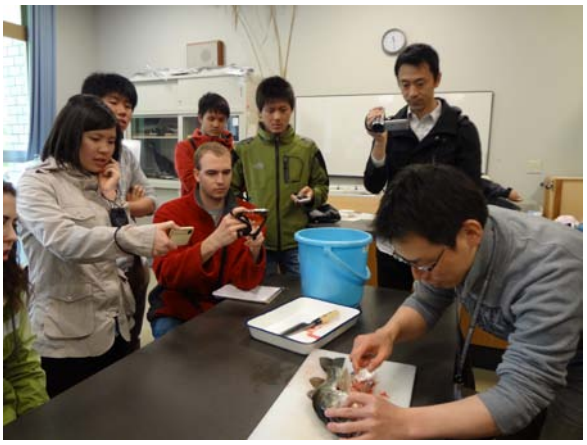
5 月 2 日報告書

文責：川村瑠璃

5 月 2 日の行程は、午前に琵琶湖博物館、午後にタキイ種苗研究農場見学でした。

琵琶湖博物館では、まず最初に研究員の方による琵琶湖の魚についてのレクチャーを行っていただき、その後実際に釣りを体験させていただきました。天候があまり良好でなく、気温も低かったためか成果は決して多くはありませんでしたが、全員合わせてブルーギルを 5 匹ほど、ブラックバスを 1 匹釣り上げました。釣ったブラックバスは解剖し、皆でいの内容物の観察も行いました。昼食後には、各自で博物館内の展示を見学し、水中生物について学びました。

タキイ種苗研究農場では、タキイが制作した英語の紹介ビデオを見させていただき、その後農場の見学をさせていただきました。時期が早かったこともあり、まだ植えられていない栽培品種も多くありましたが、試験栽培が行われている場を実際に目にすることができ、勉強になりました。



５月３日

この日はまず京都府立大学の植物工場を訪問した。ここでは、人工の光（蛍光灯、LED ライトなど）を用いた水耕栽培の研究が行われていて、その見学をさせてもらった。蛍光灯と LED の比較実験は非常に興味深い。まず、経済的な面で異なる。蛍光灯は発熱によるエネルギー損失が大きいが、LED は熱が発生しないためエネルギー損失が無い。そのため、同じ量の光を植物に与えようとするとき、LED の方が効率が良い。この施設では、こういった比較実験を重ねながら、より良い形での実用化を目指している。

ショッピングモールで昼食をとった後、午後、まず初めに高山竹林園に行った。カナダの学生にとって、竹は非常に興味深い日本ならではのもののようである。竹についての知識を教えると、とても興味深そうにメモを取りさらに質問をしてくれたのは、とてもうれしい。ここでは、日本産の茶筅の 95%が生産されており、実演で見せてもらった繊細な技術に、カナダの学生はもちろん日本の学生も感心を隠せなかった。また、抹茶を立てる体験もここでは行い、慣れない日本の伝統的な文化に苦戦しながらも、皆楽しんでいる様子だった。

最後に訪れた茶工場では、お茶の種類やその加工工程を学んだ。実際に用いられる加工用の機械を見ることで、普段考えもしなかったお茶の加工について考えることができた。加工済みのコンテスト用のお茶を見せてもらったのだが、コンテストでは味もさることながら、その形も重視されるそうで、なんとも奥が深い世界だと感じた。手入れの行き届いたお茶畑をバスのドアから眺めながら、京都市内に戻り、研修を終えた。この日は、最先端の農業技術から、古くからの伝統技法まで、幅広い日本の農について体感できた一日だったのではないだろうか。

（農・応用生命科３回生　　関谷　大貴）

５月４日

５月４日。この日は休日ということで研修も休みだったので鞍馬・貴船方面へ観光に出かけた。叡山電車に乗って鞍馬へと向かい、まずは鞍馬寺を目指して出発した。鞍馬寺は山の上にあるため体力的には中々大変な道のりだった。日本の山に生えている植物はカナダのものとはやはりだいぶ異なっていたようで、カナダの学生たちは珍しい花などを見つけるたびに写真をとっていた。その後鞍馬寺で休憩をはさんで、今度は貴船神社へと向かった。有名な木の根道を抜けて山を下りるころにはへとへとになってしまっていた。

夜は日本側の参加者である木田さんのおじいさんの家で、すき焼きをごちそうになった。すき焼きの他にもたくさんの日本料理が準備されており、カナダの学生たちも満足してくれていたようだった。何人かの学生は浴衣やたこ焼き作りの体験もし、日本の文化を肌で感じていたように思う。山に登ったり何回も電車に乗ったりと、忙しくてハード一日だったが、それだけ充実感も大きかった。登山中や夕飯の時には様々な話もすることができ、研修だけでは得られないような体験をした一日だった。

（農学部応用生命科学科三回生　見月俊吾）

5 月 5 日

資源生物科学科 4 回生　木田龍祐

アルバータ大学の生徒たちが日本に到着してちょうど 1 週間経つこの日には、彼らもすでに日本での生活にも慣れてリラックスした様子だった。5 日は休日であったので、京都の歴史や文化を知ってもらうために京都観光を行った。前日までは、カナダの生徒達は皆一緒に行動していたが、彼らの意見も考慮に入れて二つのグループに分かれて行動した。第一グループは金閣寺・嵐山を巡るルート、第二グループは京都競馬場・三十三間堂・京都市動物園・平安神宮を巡るルートであった。

第一グループは、まず金閣寺に訪れた。カナダは文明化してからの歴史が浅いので、金閣寺のような洗練された古い建造物が無いので、その美しさに驚き、感動したと言っていた。その後嵐山に行き、古めかしい街並みや天龍寺、嵐山モンキーパークに訪れたらしいが最もおもしろかったのはモンキーパークだと言っていた。というのも、カナダでは自然の猿は生息しておらず猿が周りのいたるところにいるのがとても新鮮で興味深かったからだそうだ。

第二グループは、初めに京都競馬場に行った。1 週 1600m 規模の競馬場はアルバータには無いそうで、レースを見ている際に彼らは非常に興奮し、楽しんでいた。続いて、三十三間堂を訪れたが、仏教に関する知識に直接触れられる機会がカナダではあまりないそうなので 1000 体を超える仏像を前に息をのんでいた。京都市動物園では、日本とカナダの動物園の違いに驚いていた。京都市動物園では折りが非常に低かったり、動物との触れ合いコーナーがあったりと、動物との距離が小さいと言っていた。京都市動物園も平安神宮もすべてが新鮮で、興味深いと言っていた。

この日の京都観光で、日本の分化や歴史に関して多くのことを学べたと言っていたので、大変意義のある 1 日であったと思う。

5 月 6 日

今日は天気も良く、やや気温は低かったものの良い日和となった。本日から 1 泊 2 日の舞鶴研修で、日本人学生約 7 名が参加し（うち 2 名が舞鶴まで参加）9 時に清風会館を出発した。

まずは大原の染め物工房で草木染めの体験をさせていただいた。てぬぐい大の絹のスカーフを藍、タンポポなどの花弁、茜などからつくった植物染料で皆思い思いの色に染めた。輪ゴムを利用して絞り模様を入れたり、色を重ねて新しい色を創ったりと工夫して楽しんだ。工房のご主人はとても気さくな方で、英語も達者でカナダ人学生も楽しめた様子だった。

昼食は丸亀製麺でうどんを食べた。少し混んでいたが、うどんを注文後、てんぷらをセルフで取りスムーズに会計まで行けるスタイルで滞りなく注文でき、また、メニューでの注文ではなかったので分かりやすくてよかったようだった。カナダ人学生はずいぶんとはしでの食事に慣れた様子だったので少し驚いた。

昼過ぎにはスプレッドのベジタス＋工場見学に行った。ここでは完全人工照明でのレタス栽培をしており、価格・質・量の安定した野菜供給を目標にレタスづくりをしているとのことで、これが達成できるようになったのはここ一年くらいのことだった。工場内は実験室のような雰囲気で、自然環境と全く切りはなされた野菜栽培に農業志向の強いカナダ人には受け入れがたいという意見もあった。最後にお土産で工場で栽培されたレタスをいくつかもらい、皆で試食した。本日のプログラムはここで終了し、今日舞鶴に宿泊しない日本人学生と別れ、ここから舞鶴まで向かった。

舞鶴に向かう途中でビーチによった。カナダ人学生の大半は泳ぐつもりであったのが、今日は気温 15 度前後で予想よりも寒かったために少し迷っていたが、一人が海に入るとかなりの学生が泳いでいた。海には打ち上げられたウニ、ヒトデ、タツノオトシゴや、泳ぐくらげがいるなど、皆楽しんだ様子だった。

舞鶴グランドホテルには 6 時ごろ到着し、夕食は 7 時から、ホテルのディナーであった。ホテルには大浴場があり、夕食後に何人かのカナダ人学生は大浴場に挑戦した。西欧にはこのような習慣はないので戸惑った様子だったが、大きなお風呂に皆満足した様子だったので安心した。

下里知沙

5 月 7 日

朝、舞鶴グランドホテルを出発し、京大フィールド研舞鶴水産研究所へ向かった。9 時半ごろに到着し、海水魚の生態調査の、実際の調査方法や、その結果などについて、説明を受けた。その後、施設内を見学し、調査に使う船や、餌に使うプランクトン、稚魚を用いた実験をしているところなどを見た。カナダ人学生は、海が身近にないこともあって、興味深そうだった。昼食は回転寿司で、学生たちは、注文方式や、味、コストパフォーマンスの良さなどに感心していた。ネタの魚の名前を英語で説明するのが難しかったが、午前中の説明の中に出てきた魚もあり、それらについて説明することが、結果的に午前中の水産資源の知識を補完することになったかもしれない。

その後、京都府海洋センターに移動し、ズワイガニなどの海洋資源保護や、トリガイのブランド化などの養殖技術開発、付加価値付けのような、センターの活動内容について説明を受け、実際に、カニ禁漁中に、カニだけを逃がすことのできる選択網の模型などを見学した。

見学後、バスで、京丹波にある京都大学農学研究科付属牧場へ向かった。牧場では、和牛の歴史について説明を受けた後、生育過程、肉の等級の付け方、そして、飼料の値段の高騰など、日本の和牛生産者が抱えている問題などについて聞いた。カナダ人学生の中には、畜産について専門的な知識を持っている学生もおり、また、畜産がなじみ深いということもあって、専門的な質問が飛び出したり、その後の牧場見学でも、長く立ち止まって牛の様子を観察したりしていた。

今日の研修では、海洋資源と畜産について学んだが、カナダ人学生にとっては、あまり馴染みのない分野と、比較的よく知っている分野の見学になり、前者では新鮮な興味と目新しさを、後者では自国との比較や、より深い理解を得られたのではないかと思う。私にとっても、英語で日本の海産資源や、畜産について、説明を受け、また、カナダ人学生に説明した経験は、自国の資源についての理解を深める貴重な経験になった。

写真　付属牧場での牛舎の見学
↓

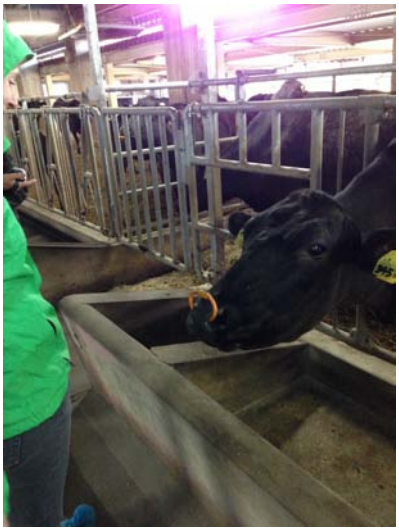


写真　水産研究所の調査船↓

（**農学部食品生物**科学科　3回生　山本莉紗子）

5 月 8 日（水）

研修も半分が過ぎたこの日は、まず北山林業地にある京都北山杉の里総合センターを訪れた。玄関を入るなり、目に飛び込んできたのは天然絞丸太や、磨丸太などの様々な丸太。カナダの学生がプラスチック製品と見間違えるほど美しかった。そして、ホールに入って DVD を鑑賞し、床柱に特化した林業の方法を学んだ。森林科学専攻である私は、北山林業についての知識を持ち合わせていたが、美しい丸太を生産するための作業工程に改めて関心を寄せた。DVD 鑑賞の後、北山丸太の倉庫へ。整然と並ぶ丸太は艶やかだった。また、丸太の肌触りの良さが心地よく、倉庫を漂う木の香りも堪能した。倉庫を出て、一同は北山杉が育つ林に足を踏み入れた。丁寧に枝打ちされ、先だけ枝が残るスギが並んでいる様子はこれまた美しい景観だった。カナダの学生は、丸太を見て、景観を眺めて「Beautiful」という単語を多く使用していた。現在厳しい状況に置かれている国内林業だが、北山林業をはじめ、日本の林業はやはり海外に通ずる「美」を持っているのかもしれない。

さて、昼食をとった後は南へ下り、三木竹材店を訪れ、管理しているマダケの林に入った。林の中は、風に揺られる竹の葉の音や、枯れた竹が乾燥して割れる音が重なり合い、厳然とした雰囲気であった。マダケは僅か 3 ヶ月で 20m 前後まで成長する。その後は伸長成長も肥大成長もしないが、材が硬くなってゆく。そして 3～5 年で伐採をする。新たに竹を植える必要はなく、毎年 6 月頃に地下茎から新しい稈（かん）が、いわゆるタケノコとして、地上に出てくる。このように竹の生態を学びながら、案内をして下さった三木さんの竹の哲学も聞き入った。例えば、竹は春になると全ての枝・葉を落とす。その枝・葉を肥料として、タケノコが新たな竹へと成長していく。これは、人間の親がその人生をかけて子どもを育て上げることに似ているという。人としての生き方を竹から学ぶという姿勢に驚きつつも、なにか心に共鳴するものがあった。

竹林から帰って来て、竹箸づくりにとりかかった。使われたのはゴマダケという、表面に斑点状の模様がある竹で、その模様が消えないよう慎重に鑢で磨いた。それぞれオリジナルのマイ箸を完成させ、本日の研修を終えた。

日本でカナダの学生と共に研修を受けることで、我々日本人が持ち合わせない角度から日本を視ることができた。このような経験を、今後とも活かしていきたい。

（森林科学科 4 回生 山下貴之）

5 月 9 日

朝 7 時半、清風会館を出発し、電車で池田市にある、インスタントラーメン発明記念館へ向かった。9 時半ごろに到着し、実際に自分でインスタントラーメンを作る体験をした。小麦粉を捏ねた後、伸ばして味をつけ、油で揚げて、麺中の水分を飛ばして即席麺にするという工程が、体験できた。出来上がったものは、自分で絵を描いたパッケージに入れて持ち帰ることができ、各自が描いた絵を見せ合ったりして盛りあがった。体験後は、インスタントラーメンの誕生や歴史について展示してあるエリアを見学した。

その後、昼食を近くでばらけて食べた。私はカナダ人学生数人と、近くのラーメン屋で食べた。カナダ人学生は、その店のラーメンの味と餃子が気に入ったらしかった。

午後は、サントリー山崎蒸留所の見学で、電車に乗って大山崎まで行った。そこで、日本のウィスキーづくりについて、実際に蒸留所の中を歩きながら、説明を受けた。蒸留所の歴史について、山崎は名水の地で、湿潤な気候であることから、ウィスキーづくりに適しており、サントリーの創業者である鳥井信治郎がここで日本のウィスキーの製造を始めたそうだ。見学後は、その山崎の名水と、その水からつくったウィスキーを飲み比べることができた。

今日は、体験や見学、試飲といった、体験型の研修で、楽しみながら学べたので、印象に残ったのではないかと思う。

（**農学部食品生物**科学科　3回生　山本莉紗子）

写真　作った麺を揚げてもらっているところ↓

写真　ウィスキーの貯蔵樽↓

日々の記録　5 月 10 日　　農学部食料環境経済学科３回生　矢島慎也

5 月 10 日は研修日の最終日でした。2 週間に渡る研修内容の発表をするため、カナダの学生によるプレゼンテーションが行われました。

プレゼンテーションの内容は、研修で学んだこと基に、日本の農業や、食品工業に関するものでした。

カナダの学生は、メモを非常に熱心にとり、常に真剣に話を聞いている。というのが一緒に研修に参加していて思ったことです。それゆえ、日本人が知らないような詳しい内容まできちんと発表されていたのが印象的です。また、写真が効果的に使われていて、わかりやすく、端的にまとめられていました。発表内容の中には、カナダと日本を比較した内容が盛り込まれていました。これによって、日本人にとっても興味部会内容となっていました。

発表以外に関して特に印象に残ったことは、発表中の喋り方と、振る舞いの仕方です。喋り方に関して言えば、発音が非常にはっきりとして、スピードが一定で、とても聞き取りやすかったです。まるで英語学習用のリスニングの CD を聞いているようでした。

また、振る舞いの仕方に関して言えば、発表中は胸を張って堂々としており、体が左右にふらつくことがありませんでした。自信に満ちた様子が感じ取れ、余裕をもって聞くことができました。また時々オーバーなアクションを取り入れたり、と、聞き手を引き付けるものでした。

このようなことは、実際に行うと非常に難しいことです。それを、外国人の前で、また馴染みがある内容ではないのにもかかわらず、当たり前のように行えるカナダの学生のスキルに驚きました。

プレゼンテーションの最後の部分には、研修以外での日本人学生との交流の写真がおさめられていました。そこで、あるカナダの学生が感極まっていたのが印象的でした。研修の発表会に、ご飯の写真を載せることは日本ではなかなか見られません。そこで感謝の意を述べる。このように、形式ばったものに偏るだけでなく、素直に感情を表現する。こういうことが、カナダの学生の魅力の一つである、と私は思います。

最後に、研修の担当をした遠藤先生に対して、カナダの学生からのプレゼントが送られ、この発表会の幕が閉じました。

おわりに

研修後、大多数のカナダの学生は、宿泊していた清風会館から早朝、シャトルタクシーで関空に出発していった。一部は日本に残って各地を訪ねるとのことであった。早朝にもかかわらず、農学部の学生も数名見送りに来ており、本プログラムが有意義であることを再確認した。

本プログラムは、いろいろな関係者の努力と支援により成功裏に終わることができた。手前味噌ながら、研修の企画から実施までを担当した両大学の教員の努力は第一ではあるが、助成金の申請手続きやマイクロバスの手配においては、第一教務や経理課の事務方の協力に大いに助けられた。農学研究科長をはじめとする執行部の協力支援は大なる励ましとなった。さらに、京都大学の全学経費と独立行政法人・日本学生支援機構からの助成を受ることができたので、本プログラムを心配、支障なく実施できた。特に後者の助成は、カナダの学生にとっては魅力的なものであったことは疑いない。今後も、このような協力と助成を受けられること祈念し、再度関係者に深く感謝して、本報告書を終わりたい。

研修を終え、清風会館から早朝の出発

2013 年 8 月 10 日

研修担当教員一同（文責・遠藤）

今西純一

遠藤隆

吉田天士

渡邉哲弘